Ｎｏ．４５９【２０２１年６月４日配信】

「生活」をテーマに撮影した工藤正市さん（担当：村上）

展示のようす

こんにちは。歴史資料室の村上です。

歴史資料室では現在、館内展示「くらしのかまり―工藤正市が撮った昭和 30 年頃の青森市」を行っています（展示期間は 6 月 30 日まで）。この展示は 3 月に行った「工藤正市写真展―よみがえる昭和 30 年頃のくらしとまち」の続編として企画したものです。展示のタイトルは歴史資料室のスタッフが正市さんの写真を見ながら考えたもので、生活の中のさまざまなにおい・香りが伝わってくる写真であることを表現しました。

展示の準備を進めるなかで、正市さんの写真にとって「生活」が重要なテーマであることがわかる資料を見つけました。それは昭和 27 年（1952）に東奥美術展（東奥日報社が昭和 6 年から同 32 年まで開催していた美術展）の写真部門で正市さんの作品が特選三席に選ばれた際の新聞記事です。この記事に正市さんの「私はいつも地方色の強い雰囲気の中から生活を撮したいと思っている」というコメントがありました（昭和 27 年 10 月 15 日付『東奥日報』）。

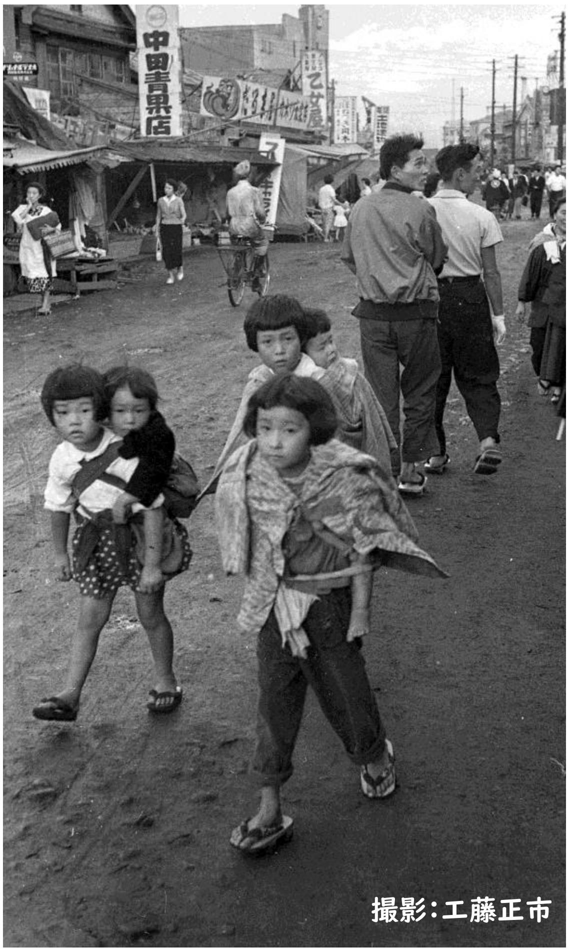
正市さんの「生活」というテーマは写真雑誌の月例コンテスト（誌上コンテスト）で審査員を務める写真家たちにも伝わっていました。雑誌『カメラ』の月例コンテスト（審査員は写真家の土門拳と木村伊兵衛）では、浜で働く女性労働者の姿を捉えた「浜の女」という作品について「生活、仕事、労働の重みが充分にとらえられている」と評価しています（『カメラ』1954 年 4 月号）。

また、別の作品に対する選評には「なが年働く人々をモチーフとして撮り続けてきた」（『カメラ』1953 年 1 月号）、「三年以上もかかって魚市場や駅前で働いている人物を扱っていた」（『カメラ』1953 年 3 月号）とあることから、正市さんが「働く人々」や「生活」というテーマで継続して撮影していたこともわかります。

さらに、雑誌『日本カメラ』の月例コンテスト（審査員は写真家・浜谷浩と写真評論家・田中雅夫）においても「かつぎ屋の子」という作品が「生活的なものが強く感じられる」と評価されました（『日本カメラ』1956 年 2 月号）。

『日本カメラ』には撮影者のコメントも掲載されており、幼いきょうだいを背負いながら遊ぶ子どもたちの姿を捉えた「子守」という作品に対して正市さんは「いつも変わらないのは庶民のささやかな生活でしょう。男の私にも子守では遠い思い出のあることです」とコメントを寄せています（『日本カメラ』1956 年 1 月号）。

人々の生活を見つめた正市さんの作品をぜひ館内展示でご覧いただければと思います。



ニコニコ通りで撮影された写真
（撮影：工藤正市　提供：工藤加奈子）